

◇ 国 語

国4-1～国4-18まで18ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

我々の日常生活における認識能力の使用など微温的なものです。朝起きて夜眠るまで、普通に生活するために視覚を用いている限りにおいては、物の色や形なぞ、ごくバクゼンと、他のものと区別が付いて間違えない程度に見えればいい。音など、人の話す言葉の音が聞き取れ、鳴っているのが電話なのか呼び鈴なのか区別が付けば充分。言葉もまた同じです。発話の音楽的側面、或いは語の文字としての存在感、或いは言葉が何かを指し示す作用そのもの、文章の作り出すテンポやノウタン、それを話す人間の声の調子、声と声とが絡み合って作り出す対立や和解の構図は、日常の言語使用の中では滅多に浮かび上がって来ない。

二 芸術は、日常的な知覚と認識の域を踏み越えるところに始まります。日常的には、映画館のロビーで待っている人々が何色の服を着ているのかを問題にする必要はありません。ただし、『カナの婚礼』を目で貪るには、擦れた赤とのコントラストで浮かび上がる緑色の鮮やかさを感じながら、奥に向って目で追って行かなければならない。電話の呼び出し音が三度上がるのが五度下がるのが認識する必要はありません。ただし音楽において、ある旋律が三度下でもう一度繰り返されて生じる感覚を味わうには、その三度を、言葉では指摘できなくとも協和する音として感じる必要がある。言語も同じです。伝達だけを目標とするなら、どれほど下手糞な——たとえば同じ単語を繰り返して続けて誤解の余地は確かにないがどうにも鈍重な文章でも、内容が汲めれば構わない、ということになるでしょうが、詩や小説で重要なのは、語が伝達する意味以上に、伝達の身振りを取りながら展開される形の狙うものを見て取ることです。

言語芸術はコミュニケーションではない、と言い切るのは、その意味では、正確ではありません——それどころか他の芸術もまたコミュニケーションだということになるでしょう。ただし、その意味するところはだいたい必ずれることとなります。芸術が伝達しようとしているのは、音が作り出すリズムであり、響きであり、旋律の展開が作り出すある構造であり、その集約としての、楽曲の「形」です。或いは、記号としての人物と小道具を並べれば充分に理解できるキリストの最初の奇跡の物語ではなく、構図と色彩によって刺激されながら導かれる視線の運動です。文学も例外ではありません。人に何か伝えようとするなら、わかり

やすく箇条書きしてチラシにでも書いて配れば充分でしょう（それさえも文学であり得るとは思いますが）。わざわざ詩にしたり、小説に組み上げたりする必要はない。物語を読み手の頭に流し込みたければ、粗筋だけをできるだけ短く纏めればいいのです。それをわざわざ小説に書き延ばすのは、物語を伝えようとするからではなく、物語を場面に展開し、人と人、人と物、人と事を出会わせ、そこで起こる運動に言語による変速を加え、移行やコントラストで固有の形を作り出したいからです。

判るのか。判らないのか。これは確かに大きな問題でしょう。

最初に、大原則をひとつ示しておきます——あらゆる芸術を理解できることは望ましいが、どうしても必要という訳ではない、ということです。

美術も、音楽も、韻文も散文も理解できる、目利きである、ということとは、勿論人間のあり方としては理想的でしょう。現代ではそこに漫画やゲームを入れる必要があるでしょうし、音楽にしても、ジャズもヒップ・ホップもクラシックも、が要求されているとは思いますが。ですが、ちょっと胸に手を当てて考えていただきたい訳です——本当にそんなことが可能かどうか。

知覚の発達は個人々人によって相当に異なります。視覚が優位なことも、聴覚が優位なこともある。電話番号を覚える時、文字で書かれたものをちらりと見てすぐに掛けられる人もいるし、電話番号案内で聞いた番号をメモも取らずに掛けられる人もいます。一度見た光景は細部に至るまで写真的に記憶できる人がいる一方、一度聞いたメロディは絶対忘れない、それどころかスピーカーで販促に流している音楽のノイズの入ったところまで覚えてる人もいます。

言語にしても同様です。意味しか理解できないという人もいれば、語の音や形、或いはゴセイの強弱の作り出す構造を読み取る人もいます。

とすれば、あらゆる人間があらゆる芸術を等しく理解できると想定することが、そもそも無理なのです。絵画には深い理解を示すが音楽はまるで駄目だったり、玄人はだしのピアノだが最も単純な物語以上のものは理解できなかったり、小説に関しては素晴らしい目利きなのに着物美人がつつじの花を背景に立っているカレンダーを壁に掛けて何の不愉快も感じなかったり、というのは、むしろ当り前のことで、恥じたり、ケツカンだと思ったりする必要はまるでない。何なら、芸術全般全て駄目、で

あつても、別に構いません。芸術以外の全てに対してもまるで鈍感というのでもない限り、人生は、おそらくですが、何か別の楽しみを提供してくれるでしょう。もちろん若いうちに、或いは年取ってからでも、絵画を楽しめるようになってみよう、音楽を楽しめるようになってみよう、小説を享樂できるようにしてみようとするのは、悪いことではありません。ただ、それで判らないということが判明しても、大した問題ではない。音楽が判るより、絵が楽しめるより、小説を味わえるよりはるかに大切なことは幾らでもあります。

全てを判らなければならない、というのは、裏返せば、理解力を欠いた事柄も判るべきだ、ということになります。当然、判る訳はない。ということは、実際には理解力を欠いた事柄さえ理解しているふりをしなければならぬ、ということになる。⁽⁴⁾ 悪しき教養主義です。

しかし理解できないのに理解するふりを、どうやってするのでしょう。

たとえば、ベートーベンの五番を聴いても何も感じない人がいるとしましょう。それは別に恥ずかしいことではない。そういう人は、悪しき教養主義さえ一掃されれば、結構いることが判明するでしょう。だから、おれにはあれば解らない、でいい筈です。ところで悪しき教養主義が命じるところに従うなら、五番が詰まらなかった、理解できなかった、は由々しき事態だということになる。だから是が非でも解らなければならぬ——それどころか、音楽としてごく自然に判る、楽しめる人々を威圧し、こいつ本当は解っていないのではないかという疑念を一掃するためにも、彼らよりはるかに解らなければならぬ。

その結果出て来るのが、たとえばこういう言葉です——「運命はかく扉を叩く」。或いは「英雄の苦闘と勝利」。どうですか？ まるで何か判っているように見えるでしょう？ もう少し手の込んだ「判り方」を披露したければ、五番をベートーベンの自伝に見立てて、ウィーン体制のヘイ塞感だのベートーベンの政治性だの苦悩だのを論じればいい。

ところで、実際彼が聴いたのは何だったのでしょうか？ 例のジャジャジャヤーン、がウィーン体制の政治的ヘイ塞にぶち当たったベートーベンの苦悩に聴こえるとするれば、それは空耳です。音楽は、言葉が言葉であるような意味では、言葉ではない。

問題なのは、我々にとって言葉の機能は純粋な聴覚や視覚よりはるかに強いということです。言葉で表現されると、ついそこ

に引き摺られてしまう。容易に言語化できるものが何もない音楽を聴くことよりは、たやすく何か言える音楽を聴くことの方が、深い、重要なことであるように思い込んで仕舞いかねない。全く無意味に音楽を享受することより、いかにも崇高そうな何かの絵解きとして音楽を理解することの方が深いと思ってしまうかねない。純粹に感性的な享受に留まるよりはるかに楽な、安易な、ただし身振りとしてはいかにももつともらしい「理解」——どれほど鈍い感性の主でも頭で理解できるものだけを並べ立てる「理解」は、芸術を純粹に享受することに対する不安を引き起し、尤もらしいキャッチコピーに飛びつかせ、最後には理解の身振りを見せびらかすだけの俗物根性が残ることになります。かくて惑わされた聴衆はまさに音が音でしかない瞬間を享受し損ね、音によるより緻密な、繊細な、或いはダイナミックな表現の可能性は、言葉によって圧殺されてしまうでしょう。

演奏家や作曲家、或いは画家については、それほど心配する必要はないのかもしれないかもしれません。もちろん彼らも言葉に騙されます。芸術家が残した政治的・哲学的発言はほぼこの類であり、本人も大して真面目ではないだけに、問題とするには値しません。しかも、彼らが実際に作品を作り出す際に使用するのは言語による思考ではなく、音による思考、線と面と色彩による思考です。言語的思考によって動きを止められるようなものではありません。

〔佐藤亜紀『小説のストラテジー』による〕

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選ぶ。

A バクゼン

- ①バクダンで焼け野原となる
- ②バクシユウの季節となる
- ③トウバクの命令が下る
- ④サバクをラクダが行く
- ⑤盗人をホバクする

1

B ノウタン

- ①ダイタンな行動に出る
- ②仕事をブンタンする
- ③レイタンな態度をとる
- ④すばらしい芸術にカンタンする
- ⑤その人は言う事がキョクタンである

2

C ゴセイ

- ①証言台でセンセイする
- ②セイコウ雨読の生活を送る
- ③病気でアンセイにしている
- ④古い師にウンセイをみてもらう
- ⑤主君にチュウセイをちかう

3

D ケツカン

- ①レジでカンジヨウをすませる
- ②カンダイな処置を願う
- ③空気のカンキが必要だ
- ④ユウカンに戦う
- ⑤守っていたとりでがカンラクする

4

E ヘイ塞

- ①シヘイを発行する
- ②城にユウヘイされたままである
- ③オウヘイな態度をとる
- ④コウヘイにもものを見る
- ⑤一人のヘイタイとして戦う

5

問二 傍線部 (a)・(b)・(c) の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(a) 「微温的」

- ① なまあたたかくて、すつきりしないこと
- ② 物事がちょうど頃合いで、受領しやすいこと
- ③ かすかにあたたかさが保たれていて、気持ちがよいこと
- ④ わずかにあたたかさが感じられて、全体にほんやりしていること
- ⑤ 物事が中途半端で徹底しないこと

6

(b) 「由々しき」

- ① うとましい
- ② むさくるしい
- ③ はなはだしい
- ④ むなしい
- ⑤ ばかばかしい

7

(c) 「俗物根性」

- ① プライドと虚栄にあふれている高慢な性質のこと
- ② 利益や名誉にとらわれてばかりいる、つまらない性質のこと
- ③ 自信と自負にあふれた、包容力のある性質のこと
- ④ 利益や名誉を無視して走り出す性質のこと
- ⑤ 目先の利益や名誉にとらわれ、先の大切なことを忘れてしまう性質のこと

8

問三 傍線部（二）「芸術は、日常的な知覚と認識の域を踏み越える」とは、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

9

- ①たとえば、音では、言葉の音や、鳴っているのが電話か呼び鈴かが理解できるということ
- ②たとえば、『カナの婚礼』が、キリストの最初の奇跡の物語だということが理解できること
- ③たとえば、長い小説の要約が箇条書きにされているのを理解すること
- ④たとえば、小説では、言葉が伝達する意味以上に、その身ぶりを取りながら展開される形を理解すること

問四 傍線部（二）「どうしても必要という訳ではない」とあるが、それはどうしてか。その説明として適当でないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

10

- ①芸術と芸術以外のものすべてに対して、鈍感であることもあるから
- ②あらゆる芸術を理解することは、まず不可能だから
- ③個人により、視覚がすぐれている人も、聴覚がすぐれている人もあるから
- ④あらゆる芸術を理解できるよりも、はるかに大切なことが、人生にいくらでもあるから

問五 傍線部(三)「着物美人がつつじの花を背景に立っているカレンダーを壁に掛けて何の不愉快も感じなかったり」とは、
どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

11

- ① 一般的には、こういう構図のカレンダーがよく売れているものだとしか感じないこと
- ② 美しいものが対照されて配置されているのに、何も感じないこと
- ③ 通俗的で、芸術的な匂いが全くないのに、何も感じないこと
- ④ 一般的で、よくある芸術的な構図のカレンダーだとしか感じないこと

問六 傍線部(四)「悪しき教養主義」とあるが、それは、たとえばどういうことか。最も適当なものを、次の①～④の中から
一つ選べ。

12

- ① ベートーベンの五番をきいても、何も感じず、わからないこと
- ② ベートーベンの五番をきいて、何も感じないのに「運命はかく扉を叩く」と理解すること
- ③ ベートーベンの五番をきいて、ベートーベンの苦悩の音がきこえてくること
- ④ ベートーベンの五番をきいて、その音楽を言葉で説明したくなること

問七 傍線部(五)「それほど心配する必要はないのかもしれませんが」とあるが、それはどうしてか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

①音楽家や画家が、実際に作品を作り出す時に使用するのは、音や線や面や色彩による思考で、言葉による思考に引き摺られることはないから

②音楽家や画家は、聴覚や視覚が鋭くできているので、言葉に対する感覚は鈍くても、それほど重要なことではないから

③音楽家や画家も、言葉に騙されることはあるが、その政治的、哲学的発言は、彼らの中心の仕事ではないから

④音楽家や画家は、彼らの音楽や絵画を作る時、言葉による思考に引き摺られてしまうことが、たまにあるから

13

問八 本文の内容と合致しないものを、次の①～⑧から二つ選べ。

①筆者は、芸術とは主に、音楽、美術、文学だとして、それについて述べている。

②現代では、漫画やゲームを理解できることが大切である。

③言葉の機能は、音や色彩の機能よりもはるかに強いのである。

④詩や小説で大切なのは、伝達しようとする意味を正確に伝えることである。

⑤音楽や絵画、小説を楽しめるようになるうとするのは悪いことではない。

⑥『カナの婚礼』は、絵画である。

⑦芸術は、一種のコミュニケーションである。

⑧一度見た光景を細部に至るまで記憶できる人がいる。

14
15

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「生涯学習」という言葉はカンリョウ^アがつくつたのだろうか。誰がつくつたにしても、この言葉はあまりにも妙だ。大人が今さら学習しても仕方がないからだ。

そもそも、学習とは何だろう。学習の本質は「まねび」、真似をすることだ。たとえば、まだ字がろくに書けない子供が手本の字を真似して書く。これが学習だ。したがって、上手に真似ることをよしとする。

ア、子供や初心者が毛筆で字を真似て書くことを習字という。書道とは決していわない。書道とは、習うことから離れて、自分なりの字を書くことだ。

大人であっても依然と毛筆を習っている人がいる。それは習字である。それを習字ではなく書道と呼んでいることがあるが、大人の自尊心を傷つけないための配慮にすぎない。中身はまごうかたなく習字であり、月謝を払って時間をつぶしながら新しい^イ知己を増やすのが主旨の趣味なのである。

本書で扱う独学は、人生に意味を失いつつある人の暇を埋める趣味のお勉強ではない。教師や講師の通りに真似をしてよしとする低レベルの学習でもない。

学習は年端もいかないう子供がするもの、何も知らない者がとりかかる最初の数歩のことだ。そこをすでに超えている大人がするものが独学である。つまりLEARN（ラーン）ではなく、STUDY（スタディ）だということだ。

スタディは究めるという意味だが、日本語ではこういう言い方をしない。研究とすると、意味合いが少し異なるニュアンスがあるため、本書ではやはり聞き慣れた表現「学習する」や「勉強する」を使うことになる。けれども、その意味に込められているのはもちろん、「まねび」ではなく、スタディである。

ところで、独学というこの字面はいかにも孤独な感じがする。独りで黙々と陰気に机に向かっている印象すら受ける。けれども、独学の独とは孤独という意味ではなく、特定の師を持たないということだ。

特定の師を持たない。しかし、多くの師を持つ。しかも、そのへんの中途半端な教師を師とするのではなく、本物の最高レベルの師を持つのが独学である。具体的にいうと、最高レベルの書物を師とするわけである。

しかし、外国語の習得などは独学では無理だろうと懸念する人もいるだろう。たとえば語学学校に行つて講師に教わる必要が出てくるはずだ、というわけだ。その場合でもしかし、自己努力という意味での独学がなければ外国語は習得されない。

語学学校に行つてみればすぐにわかる。二百人が同時期に入学して、最後の課程までついてこられるのは数人あればいいほうである。九五%以上の生徒が途中で早々と挫折し、最後まで習得できるのはほんの数人だけである。

なぜならば、語学学校に行こうが大学に通おうが、自分で勉強しなければ、つまるところ何も身につかないからだ。つまり、自分で独学するという裏打ちがなければヒョウジュンの課程さえこなせないのである。その独学ができない人があまりにも多いから、語学学校は生徒の出入りが激しくなり、その分だけたんまり儲かるというわけである。 …略…

私事になるが、わたしは学校での勉強が苦手だった。テストのための勉強もほとんどしなかった、というか、満足にできなかった。指導ヨウリヨウにしたがつて黒板の前で説明されていく事柄をそのまま覚えることなど無理だった。大学に入つてもほとんどの授業に興味がなく、欠席して玉撞きをするか、古い本を読むかだった。

イ、本を読むということは大学の教授が研究で読んでいる本を読むことだから、彼らと同じレベルに立つことでもあった。すると、どうなるか。教授が授業でどこをしゃべっているか、どこを曖昧に説明しているかやがてわかるようになるのである。

ウ、常に成績のいい学生はテスト勉強をして優を取るのだが、私はテストのための勉強をせずに優を取ることができた。これは奇妙な感じだった。大学は私の外ではなく、私の内にあつたわけだ。

試験に受かったのでドイツの大学に入ってみたものの、結局そこでもしなければならぬことは独学だった。学年という制度がないので、古代ギリシア語・古代ラテン語・中世ドイツ語といった語学以外に必修科目はほとんどなく、今年入学した者も博士課程の者も授業は同じだった。何をどう研究するかは個々の学生の意志と興味によるのである。教授は授業という形でサンプルを示すだけである。要するに、独学の場合だった。

よく口にされる「大学へ行ったって、社会では通用しないよ」という言い方はまちがっている。大学へ行っても独学していないから実社会で役に立たないのである。

「もっと勉強しておけばよかった」というコウカイもまちがいだ。学校では、あらかじめ用意された答えに合わせた勉強（のよ）なものもできるし、独学もできる。

学校でしか勉強できないという思い込みが、こういう考え方の背景にある。勉強したいのなら、たった今から独学すればいいだけである。実験や機器を必要とする理科系以外の勉強なら、ほぼすべて自分でできる。障碍は何もない。

ちなみに、十九世紀の哲学者ニーチェは『人間的、あまりに人間的』の断章二五六にこんなことを書いている。

「知ではなく能が学問で鍛えられる。——一つの厳密な学問をしばらくの間厳密にやってきたことの価値は、格別その成果に基づくというわけではない、なぜならこういう成果は、知るにあたいする事柄の大海に比して、消え去るほど小さい一滴にすぎぬだろうからである。しかしそれはエネルギー・推理力・持久力の強靱さなどを増大させる……」（池尾健一訳）

わたしはこの部分を、『超訳ニーチェの言葉Ⅱ』で次のように訳し変えた。こちらのほうが文意が明確となり、ニーチェの強調点が明確になっているだろうので引いておく。

「……勉強がもたらすものは実は別のところにある。勉強によって能力が鍛えられるのだ。丹念に調査をする力、推理や推論の力、持久力や根気、多面的に見る力、仮説を立ててみる力などだ。身についたこれらの能力は異なる分野でも大いに通用するものとなる」

読者はすでにおわかりだろうが、勉強によって得られる知識の効力よりも、勉強をすることで身につく能力のほうがあとあと

になつて広く応用がきくということだ。

もつと辛辣しんらつに言い換えれば、テストの点数が高くても本人の能力の高さを証明しているわけではないということだ。テストでいい点数がとれなくても、本人は人生においていくらかでもユウヅウEが利くもつと大事なことを自分に体得させているかもしれないのだ。

そのためにも独学は有効な手段なのである。

〔白取春彦『独学術』による〕

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選ぶ。

A カンリヨウ

- ① 寄宿舎にニユウリヨウする
- ③ リツリヨウ政治を行う
- ⑤ 公序リヨウゾクに反する事項

- ② 土地をリヨウユウする
- ④ 職場のドウリヨウ

16

B ヒヨウジユン

- ① 大勢でヒヨウギする
- ③ ショウヒヨウを登録する
- ⑤ ポートでヒヨウリユウする

- ② 選挙のトウヒヨウに行く
- ④ イヒヨウを突く作戦

17

C ヨウリヨウ

- ① 大学が発行するキヨウ
- ③ 菓のヨウホウを守る
- ⑤ ボンヨウな人物

- ② ヨウシの整った人
- ④ 複雑なヨウソウを呈する

18

D コウカイ

- ① カイトウ乱麻を断つ
- ③ 前非をカイゴする
- ⑤ 起死カイセイの策を講じる

- ② 紛争にカイニユウする
- ④ 部下をクンカイする

19

E ユウヅウ

- ① 地方をユウゼイする
- ③ 新入生をカンユウする
- ⑤ ユウグウされる人物

- ② キンユウ取引を行う
- ④ ヨユウのある表情

20

問二 傍線部 (a)・(c)・(d) の語義として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選べ。

(a) 知己

- ①優れた技術
- ②自分の能力
- ③知恵や知識
- ④面識のある人
- ⑤人生のやりがい

21

(c) はしょっている

- ①補足している
- ②間違えている
- ③改変している
- ④強調している
- ⑤省略している

22

(d) 断章

- ①文章から抜粋された一部分
- ②主張を強く述べている箇所
- ③未完のまま残されていた原稿
- ④本題からは逸^それた挿話
- ⑤本の最後に配された章

23

問三 傍線部 (b) 「書物」とあるが、「書物が多数あるさま」を表す四字熟語を、次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ①四書五経
- ④汗牛充棟

- ②博覧強記
- ⑤読書百遍

③有職故実

24

問四 空欄 ・ ・ に入る語句の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ

選べ。

- ① だから―しかし―そして
- ② そのため―つまり―ところで
- ③ また―したがって―しかし
- ④ もとより―要するに―すなわち
- ⑤ つまるところ―ただし―ところが

問五 傍線部(一)「この言葉はあまりにも妙だ」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 学習とは自ら物事の本質を知ろうとすることであるが、先の短い大人がそうした努力をし続けたとしても生産性が見込めないから。
- ② 学習とは元来何も知らない子供が模倣をすることであり、大人が死ぬまでそのような行為をし続けることには意味がないから。
- ③ 学習とは「まねぶ」ことに始まり独創性のあるものを生み出すことに終わるが、その行為は幼少期においてこそ可能であるから。
- ④ 学習とは周囲のものから新しい何かを吸収することであり、その行為が生涯続くということは既に自明のことであるから。

問六 傍線部(二)「大学は私の外ではなく、私の内にあつたわけだ」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

27

- ①大学でよい成績を修めるためには、最小限の努力で最大限の効果を上げる勉強法を自ら考案しなければならないということ
- ②大学で学べることは高校での暗記学習とほとんど変わらないが、読書と思索は自分の内面性を磨く上で大いに役立つということ
- ③大学の授業は難しいことを取り上げているかに見えるが、実は自分たちが普段考えていることと大して差がないということ
- ④大学での学びの本質は、授業に出ること自体にあるのではなく、自ら調べ、知ろうとすることにこそあるということ

問七 傍線部(三)「一つの厳密な学問をしばらくの間厳密にやってきたことの価値は、格別その成果に基づくというわけではない」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

28

- ①厳密な学問をしていれば、成果はおのずと後からついてくるということ
- ②学問の価値は、成果よりもむしろ研究過程の厳密さにあるということ
- ③成果を出すことだけが、学問に取り組むことの価値ではないということ
- ④学問に真剣に取り組んだからといって、必ずしも成果は出ないということ

問八 本文で言うところの「独学」の実践例として、最もふさわしくないものを、次の①～④の中から一つ選べ。

29

- ① 受験勉強の際、独自のノートを作って勉強してきたAさんは、大学生になってからも綿密な書き込みをしたオリジナルノートを作って学問に励み、優秀な成績を修めた。
- ② 常に図書館で調べ物を行い、立派な卒業論文を書き上げた大学生のB君は、卒業後TV局に入社し、時代のニーズを的確にとらえたニュース番組をプロデュースするようになった。
- ③ 高校時代、複数科目の授業内容をつぶさに暗記したCさんは、そのエピソードを見込まれてクイズ番組に出演することになり、豊富な知識を活かして見事優勝を果たした。
- ④ 理系の研究室に所属し、毎日地道に実験を行ってきた大学院生のD君は、研究職にこそ就けなかったが、商社の営業マンとなつて多くの取引を成立させた。

問九 本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。

30

- ① 人生の中で、勉強ができる時や場所は限られている。だからこそ、学生時代には意欲的に学ぼうとする姿勢を持ち、最高レベルの書物を師として様々な能力を身に付けていくべきである。
- ② 学問を通してどんな知識を得たかということとはさほど重要ではない。それよりも、学問を通して得られる能力が、その後の人生の大きな支えになるという点こそが大切である。
- ③ 人生において、テストで高い点を取ったという事実は必ずしも重要ではない。それよりも、孤独に耐えながら探究し続けるという地道な取り組みこそ意味がある。
- ④ 語学学校で中途退学者が続出している現状からもわかるように、昨今の若者で独学を実践できる者は少ない。そうした状況を打破するためにも、幼い頃から独学を始めることが重要である。